美術工芸品

京北文化遺産センター令和７年度企画展「世界地図を拡げて －大航海時代の京都と山国－」関連企画

座談会「山國神社に伝わる世界地図をひもとく」

鳥居　剛・藤田　明良・村山　弘太郎
山下 絵美 編

開催日時：令和７年８月３０日(土)
午後１時３０分～３時
場　所：京北文化遺産センター
多目的ルーム
主　催：京都市文化財保護課
協　力：京北文化財調査会
登壇者：鳥居　剛（山國神社宮司）
藤田　明良（天理大学教授）
村山　弘太郎
（京北文化財調査会代表・
京都外国語大学教授
／コーディネーター）

［**山下**］みなさんこんにちは、本日は暑いなかお越しくださいましてありがとうございます。京都市文化財保護課で文化財保護技師をしております山下と申します。本日は司会を務めさせていただきます、よろしくお願いします。本日は、展示室で開催しております「世界地図を拡げて」という展覧会[1]〈図１〉の関連行事として、座談会を開催することになりました。展覧会の主役は、山國神社に伝わる２枚の世界地図になります〈図２・３〉。こちらの世界地図は、令和７年（2025）３月に京都市の指定文化財になりました[2]。

文化財指定や、指定に向けての調査は、京北の皆さんのお力をお借りして実現することができました。その成果を、ぜひ京北の皆さんにご報告できたらという思いで、今回の座談会を開催させていただきました。本日は、指定にあたり大変お世話になりました先生方にお話をいただきます。ここからは、コーディネーターの村山弘太郎先生に進行をお預けしたいと思いますので、村山先生よろしくお願いいたします。

［**村山**］本日は暑い中たくさんの皆様にお集まりいただきましたこと、感謝申し上げます。今回の座談会のコーディネーターを務めさせていただきます、京都外国語大学の村山弘太郎と申します。まず、今回の登壇者の先生をご紹介させていただきます。山國神社宮司の鳥居剛先生です。もうひと

図１　展覧会「世界地図を拡げて
－大航海時代の京都と山国－」チラシ

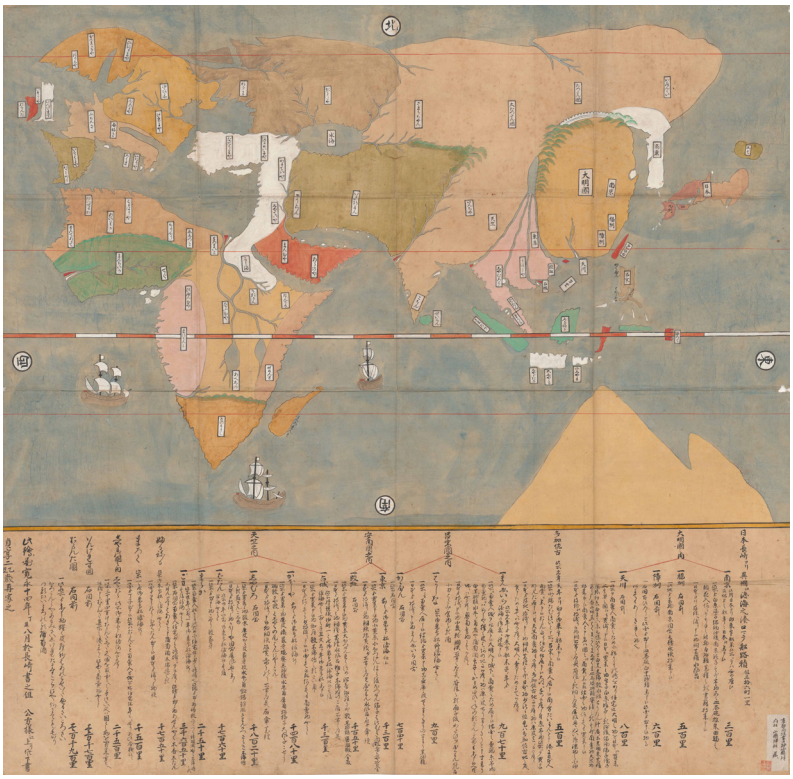

図２　異国渡海船路積図　山國神社蔵

図３　大明地理之図　山國神社蔵

方、今回の地図につきまして非常に多く調べていただきました、天理大学の藤田明良先生です。わたしはコーディネーターを務めさせていただきまして、京北文化財調査会の代表も務めさせていただいております。京北文化財調査会とは何ぞやということなんですけれども、今回のこの２枚の地図、こちらの文化財指定をかけようということで、京都市さんと一緒に研究者が集まって結成した調査会になります。第一の目的は文化財指定ということで、それを達成することができたわけでありますけれども、ここで解散というわけではございませんでして、この京北地域に伝わる様々な文化財に光を当てて普及していく、皆さんに知っていただくというような活動を続けていけたらよいかなあというように考えております。

文化庁でも、文化財はこれまでの「とっておいた文化財」というふうな表現から、「とっておきの文化財」ということで、文化財の普及啓発活動にも力を入れていっておりますので、そういったところのお手伝いをできたらと考えておりますので、引き続きこの地域に眠る、まだ光が当たっていない、非常に重要なお宝が眠っているかと思いますので、こういったものの調査あるいは活用、保存も含めてお手伝いできたらいいかなというふうに考えております。

その第一弾としまして、先ほどから申し上げておりますように、２枚の地図、原寸大のレプリカがそちらの展示室にもございますので、まだご覧になってない方はぜひご覧いただきたいと思うんですけれども、こちらの地図につきまして、天理大学の藤田先生にしっかりと調べていただきました結果、いろいろな来歴、なぜここに残っているのかというようなところが明らかになって参りました。この辺りにつきまして、先生からお話を伺い、そして鳥居先生からは、どのように地図と山國神社が関わってこられたのか、鳥居先生の視点からお話をいただきたいと思います。では早速でございますけれども、鳥居先生よろしくお願いいたします。

［**鳥居**］そうしましたらわたしの方からは、山國神社〈図４〉では、この地図を今までどのように扱ってきたか、文化財になるとは全く思っていませんでしたので、文化財指定を受けたときにどのように思ったかということを、まずはお話したいと思います。それから、今日おいでになった方は、ほとんどは山国の方だと思いますけれども、山國神社についてというテーマでもありますので、最後に少し山國神社のことを紹介して終わりたいと思います。

まずこの地図なんですけれども、「異国渡海船路積図（いこくとかいせんろつもりず）」は畳半畳くらいの大きさです。「大明地理之図（だいみんちりのず）」は四畳半ぐらいの大きさで非常に大きい。山國神社では、各町から２名ずつ２年間、総代を務めるんですけ

図４　山國神社

れども、そういったことをしてきていただいた方がたくさんいらっしゃって、そういう方が山國神社にいるうちに、藤野前宮司が年に１回くらいは虫干しをしようということで、「大明地理之図」を毎年蔵から出して虫干しをしておりました。その頃は珍しいものだとか、日本に何枚しかないとか、他に持っておられるのはどういうところだとか、そういったことは全く考えておりませんでした。山國神社の蔵の中には棚がちゃんと作ってありまして、もともとは小さく折り畳んで、箱に収めて蔵に入れておりました。「異国渡海船路積図」ですけれども、わたしが最初に聞いたのが、藤野前宮司から、東京大学史料編纂所から、昔に模写をした図をアーカイブしてインターネットで公開するので了承して欲しいという手紙が来たということでした。山國神社では「異国渡海船路積図」は、それまで見たことはありませんし、ちょうど同じ頃だと思いますけれども、藤田先生からは、山國神社にこういう地図があるはずだから、今でも見れるかというような趣旨の問い合わせが来ていたのを覚えています。でもそれは見つからないから、今はありませんというふうに返事した、ということを藤野前宮司はおっしゃってました。先ほどの東京大学史料編纂所の件ですけれども、昭和のはじめ頃に模写をされて、長いこと向こうの蔵に入っていたんだと思います[3]。

座談会会場風景

その後、ないと言っていたものが山國神社の蔵にありました。どうやってわかったかというと、坂田聡先生という中央大学の先生が長く山国荘のいろいろなことを調べておられましたけれども、その先生が作られた山國神社の古文書の目録[4]の中に「異国渡海船路積図」のことが書いてあったんですね[5]。たくさんありますから、目録に書いていただいても、ここにありますと言われないとなかなかわからないんだけれども、目録を調べましたら確かに書いてあって、番号も振ってありますので、蔵に入ってみたら、いろいろな古文書の間に折り畳んでありまして、大きいままではありませんのでわからないんですが、出てきました。

その頃とあわせて、皆さんも覚えておられるかもしれませんけれども、令和元年頃に山国荘の研究発表会が京北出張所でありました[6]。その頃に山國神社でこの２枚の地図が発見されたと京都新聞に載ったんですね[7]。わたしたちにしたら発見と言うより、とくに「大明地理之図」は前からあったし[8]、確かになくなったものが見つかったという意味で発見かもしれないけど、そういった認識はあまり持っていなかったんですけど、新聞に載りました。

新聞に載ったことで、藤野前宮司が「ひょっとすると誰かが蔵を破りに来るかもしれない、そのうちになくなってしまうと困る」という話がありまして、どこかに預けようと。それで京都府さんと京都市さ

んに預かってもらえるかという話をしましたところ、京都市さんが預かっても構いませんということを言ってくださったので、現在は山國神社ではなく、京都市歴史資料館に預かってもらってます。預けてしまいますと山國神社で見ていたように見るわけにはいかなくて、見ようと思うといろいろな手続きが必要になるんですけれども、今申しましたように、神社に関係していたものはですね、文化財になるとか、重要だとかあんまり思わずに、虫干しをしていたことを覚えてます。

去年の冬に、京都市歴史資料館の収蔵庫から地図を出してきて、そのときに美術専門の業者さんがいらっしゃって、地図を広げてくださるんですけれども、実に丁寧なんですね。その広げ方にびっくりしてしまって、こういうふうに広げないといけないのかと。それから比べたら山國神社では随分いい加減なことしていて、ちょうどいい時期に預かっていただけたなと。なかなか実物を見ることはできませんけれども、こういった意味では安心だなというふうに山國神社では思っております。地図についてはわたしの認識はそういうことです。たまたまその時期が、わたしは平成23年（2011）から28年までの６年間、山國神社の総代をしておりました。そのあと神職の資格を取りまして、28年以降は権禰宜、令和２年（2020）から宮司をしてございますが、そういったようななかで見聞きした地図についてお話をさせてもらいました。

また遠くからおいでになっております方もあるかもしれませんので、山國神社のお話をしますと、この山国の里は山国荘ということで、奈良にある長屋邸跡（奈良市二条大路南）から出土した木簡に山国の里と書いてあって[9]、山国のことが書かれたもので一番古いんじゃないかと思います。だいたい奈良時代のはじめ頃ですかね。その後、山國神社が創建されたのがだいたい770年から780年頃、奈良時代の終わり頃に創建されています。その後に、ちょうど皆様もＮＨＫの大河ドラマ「光る君へ」がご記憶にあるかと思いますが、源氏物語の書かれた時代に、正一位という地位を三条天皇からいただいています。三条天皇は目が悪くて、山國神社に願をかけて、目の具合が治ったので、山國神社は正一位を賜ったということが伝わっています。山國神社を拝むのに目が悪いからということは、もう今は誰も思わないのかもしれませんけれども、実はそういうようなこともあって、正一位という地位を賜ったそうです。それから平安時代の中頃ですけれども『延喜式』（「延喜式神名帳」）というものが書かれてるんですけれども、山國神社は式内社ですので、この中にも山國神社らしき名前が出てくるということで、多分これが山國神社だろうと言われておりまして、かなり古くから歴史の中に少しずつでも名前が出て

鳥居剛氏

きている神社でございます。山國神社の紹介をさせていただきました。わたしの方からは以上です。

[**村山**] ありがとうございました。続きまして藤田先生よろしくお願いいたします。

[**藤田**] 皆さんこんにちは。大和の国から来た藤田でございます。早速ですが資料を１枚用意していただきましたので、その資料とスクリーンを見ながらお話を聴いていただけたらと思います。「山國神社に伝わる２種の世界地図の位置づけ」というタイトルを付けましたが、２種類の世界地図というのは、先ほど紹介のあった「異国渡海船路積図」という、京都市が文化財指定をするにあたって付けた名前の図です。わたしたちは下に書いてある貿易に関する情報に注目したので、「貿易情報文付旧世界図（ぼうえきじょうほうぶんつききゅうせかいず）」ということもあります。それからもう１枚が「大明地理之図」、中国の明朝ですね、日本でいえばだいたい室町時代から江戸時代のはじめにかけて続いた王朝ですけれど、その時代の中国を描いた図であります。

それではまず、わたしがどうしてこの地図と関わったのか、どうして出会ったのかというお話を簡単にしておきたいと思います。いま大学の学問研究は、ひとつの大学だけではなくて、いろいろな大学からメンバーを集めて、まざり合ってやるのが主流となっています、共同研究ですね。この２枚の地図には３つのチームが関わっています。ひとつは東大チームと書きましたが、東京大学の先生が代表になって、史料編纂所というというところから補助金をもらって行った共同研究プロジェクトです。わたしもそこに研究分担者として入っておりました。これはおもに「貿易情報文付旧世界図（異国渡海船路積図）」を研究しておりました。

もうひとつは、「大明地理之図」の研究を始めていた東洋文庫チーム。東洋文庫は東京の駒込にある、岩崎弥太郎が出資して設立した東洋の歴史文化の研究を専門にする研究機関で、博物館も併設しています。それからもうひとつが先ほどお名前が出た、坂田聡先生を中心とする中央大学のチームです。これが「山国荘調査団」という名前で、地元に残っている古文書を懇切丁寧に調査して目録を作りました[10]。わたしは東大チームの一員として、この系統の地図の所在を確認しておりましたので、山國神社にも聞いたのですが、先ほどのお話のように、当時はそういう地図は見当たらないということで、所在不明と報告書に書きました。その報告書を印刷物にするときに、史料編纂所の編集者から「隣の机の人が、“この地図、坂田先生の文書目録に載っていたような気がする”と言ってますよ」と電話があって、早速中央大学チーム作成の目録を取り寄せて調べたら、山林争論の図が入っているところにこの地図が収まってお

藤田明良氏

りました。それで翌年の平成30年（2018）に、東大チームと中大チームが合同で、この地図の実在を確認し、「再発見」にいたり、それが先ほどの京都新聞の記事にもなりました。

さらに東洋文庫チームには、わたしの名古屋大学の学生時代の先輩がおりました。たまたま会ったときに、こういう地図を最近見たんだという話をしたら、「それは自分たちが今探している地図だ」ということになって、それで東洋文庫チームも調査に合流して、一緒に研究してきました。ですからこれからの話は、わたしが調べたというよりも、この３つのチームが力を合わせた成果の一部を紹介するということになります。

次に、「異国渡海船路積図（貿易情報文付旧世界図）」のことを簡単に紹介しておきます。地図の部分と、その下に文字情報が入っていて、地図はわりと簡単な地図なんですけれど、文字情報が大変詳細で、しかも本を読んだりして情報を集めたのではなくて、自分で見てきたような非常に生々しい情報が入っている。これを最初に分析した歴史研究者は、「実際に朱印船貿易と関わったことのある人物でないと書けない情報だ」と表現しました。

配布した資料に、わたしたちが調査して現在所在が分かっている13種類の「異国渡海船路積図（貿易情報文付旧世界図）」を表にしております〈図５〉。同じ地図といっても微妙な違いがあるので３つのグループに分類しました。Ａグループは簡単に言うと、地図は簡略だけれど文字情報が詳しいというものです。これに対してＢ１グループは、逆に文字情報の方は省略が多くて、地図の方はより新しい詳細な地図になっているというものです。さらにＢ２グループは、内容はＢ１と同じですが、１枚の地図ではなくて屏風に仕立ててあり、中央に地図があって、両端に文字情報が分かれているというタイプです。この13種類の地図は全てオリジナル（原本）ではなく写本（模本）という写しです。山國神社に伝わってきた地図は、そのなかでも模写年代が一番古いものです。しかも他の所蔵者を見てもらうとわかるように、大学図書館だとか、博物館だとか、総持寺は横浜にある曹洞宗の大本山ですが、そういう大きなお寺や博物館・図書館が所蔵しているもので、こちらのような閑静な山あいの神社に、このような地図が伝っているということはたいへん驚きました。

もう１枚の地図は中国を中心に東アジア全体を描いた巨大な「大明地理之図」です。これは、浅井周伯（1643－1705）という医師[11]が京都の「御幸町錦小路上ル町」で開いていた私塾「養志堂」がこの祖本にあたるものを所蔵していたということが、この地図に載っている文字情報からわかります。ただし、その養志堂は後に火事で焼けてしまうんですね[12]。そのときに養志堂の地図が救出されたかどうかは分かっておらず、現在は所在不明です。その養志堂の地図を源流とする写本が８点残っており、表のようになります〈図６〉[13]。やはり山國神社の地図が一番古く、「延宝９年（1681）に作成された養志堂所蔵の地図を元禄３年（1690）に、模写した」という文字情報が載っています。その次は東京大

所蔵先	摘　　要	分類
① 山国神社本	貞享 2 年 1685 の写本　東京大学史料編纂所にこの地図の 1936 の模写本が所在	A
② 古河市本	元禄 4 年 1691 の写本を天保 7 年 1836 に古河藩家老の鷹見泉石が大阪で模写	A
③ 横浜市立本	大学図書館「鮎川信太郎文庫」所蔵　1918 に東洋学者が古書店で購入	A
④ 山口大学本	図書館「棲息堂文庫」所蔵　徳山藩主毛利元次（1690 ～ 1716）旧蔵	A
⑤ 神戸市博本 a	博物館「南波松太郎旧蔵コレクション」所蔵　原名「苍蔵世界図」	A
⑥ 臼杵市本	臼杵藩主稲葉家旧蔵　「異国之図」として同じ地図が 2 点存在	B 1
⑦ 国会図書館本	絵図集『古城及古戦場図』の第 32 冊中に所在	B 1
⑧ 総持寺本	原名「南瞻部世界図」　東京大学史料編纂所写真本・模写本あり	B 1
⑨ 佐賀県図本	県立図書館「蓮池鍋島文庫」所蔵。原名「世界図」	B 1
⑩ 神戸市博本 b	博物館「南波松太郎旧蔵コレクション」所蔵　原名「旧世界図 (仮)」	B 1
⑪ 石橋五郎本	京都帝大石橋教授所蔵　戦災で焼失 秋岡武次郎氏撮影の写真残る	B 1
⑫ 岡山県博本	原名「旧大陸図屏風」　旧御津町金川の日蓮宗妙覚寺より寄託	B 2
⑬ 堺市博本	原名「世界図屏風」　旧堺市中之町の河盛家旧蔵　日本図とセット	B 2

図５　「貿易情報文付旧世界図（異国渡海船路積図）」一覧

	所　蔵　機　関	題　名	縦 × 横	模写年代、模写者、旧蔵者など
1	京都府山国神社	大明地理之圖	284.5 × 365.0	元禄 3 年 1690 に養志堂所蔵の延宝 9 年 1681 の図を模写
2	東大東洋文化研究所	大明地理之圖	288.0 × 358.2	貞享 3 年 1686 に養志堂で模写。元禄 3 年 1690 に再捕写
3	天理図書館	大明地理之圖	277.0 × 346.0	元禄 7 年 1694 に延宝 9 年の図を模写
4	国立ギメ東洋美術館	明朝地理之圖	300.0 × 380.0	宝暦 12 年（1762）に常照寺で周山の村山光衆が模写
5	中央大学付属図書館	大明地理之圖	298.2 × 382.8	文化 7 年 1810 に馬杉玄鶴が模写。地理学者青野壽郎旧蔵
6	公益財団法人東洋文庫	大明地理之圖	344.8 × 360.8	文化 11 年 1814 に山形の医師細矢玄俊が京都で模写 *
7	デンバー美術館	大明地理圖	289.5 × 355.6	延宝 9 年の図を模写。岩倉具視旧蔵。
8	宮城県図書館	大明地理之圖	不詳	元禄 7 年 1694 模写。仙台藩士山家豊三旧蔵

*2014 年に細矢家から東洋文庫に寄贈

図６　「大明地理之図」一覧

学の東洋文化研究所が所蔵しているものになります。最初に模写したのは山國神社の地図よりもちょっと古い貞享３年（1686）なんですけれど、再補写といって、元禄３年にもう一度描き直してるんですね。だからやり直していないものとしては山國神社のものが一番古いことになります。ちなみにわたしの所属する天理大学の図書館も同じタイプの写本を所蔵しています。

また後で紹介しますが、外国の美術館も所蔵しているんです。フランスのパリにある、ルーブル美術館に次ぐくらいに有名な、ギメ東洋美術館というところがあります。ここが所蔵しているんですね。それからこれはちゃんと調査できていないんですけれど、冬季オリンピックがあったアメリカのデンバーにある美術館も所蔵しているそうです。だから山國神社以外は、大学図書館だとか、世界的に有名な美術館だとかそういうところが所蔵していることになります。

ではどうして「大明地理之図」が山國神社に伝わったのか。これは少しずつ分かってきています。明治７年（1874）、幕末から明治に入って少し落ち着いた頃です。このときに村の体制も、中世以来続いてきた八ヶ村あるいは十ヶ村の名主（みょうしゅ）の連合体が村を自治的に運営するという体制から、近代的な大区小区制という地方制度に変わっていく時期なんですけれど、それまでのあいだ、高田寺（こうでんじ）というお寺に収められていた山国郷の名主の諸道具を売り出します[14]。先ほど現地に行ってきたんですけれど、御霊神社の神宮寺だったんですね〈図７〉。高田寺には八ヶ村あるいは十ヶ村の名主たちの共有財産を収める宝蔵がありました。高田寺の宝蔵は幕末に洪水で被害に遭ったのですが、そのときに救出されたものは御霊神社の本殿と拝殿に納められているんですけど、それを新しい村の体制をスタートさせるために、一旦お金に変えるということになります。お金に換えるといってもよそに売るんじゃなくて、名主たちのなかで比較的ゆとりがある、お金のある人たちが自分たちでお金を出して、村の費用のためにそれを買い取るという形にしました。そのときにこの２枚の地図ですね、１枚は「万国図壱軸」と出ています。これは誰が買ったかというと、山國神社の宮司であった辻村の藤野斎さんが買いました。もう１枚は「残りもの」というなかに、「万国地図面壱枚」というのがありまして、「万国図壱軸」というのが小さい方の「異国渡海船路積図（貿易情報文付旧世界図）」、「万国地図面壱枚」が大きい方の「大明地理之図」だと考えられています。おそらく藤野は大きい方は買っても手に余るから、小さい方だけ買ったんだと思います。ちなみにこのとき

図７　御霊神社に建つ石碑
「元高田寺境内　比賀江小学校跡地」

「万国図壱軸」をいくらで買ったかというと「弐歩弐百文」、現在の価値に直すと４万円前後です。このとき藤野は大きな徳利（「大徳利」）、お酒を実際飲むのではなくて床の間に飾るものだと思うんですけれど、大きな徳利も「壱両壱歩」、10万円前後で購入しています。ちなみにこのときの最高購入額は、釣燈籠（「釣燈篭 大」）の「三両弐朱」、約25万円ですね、これは溝口畔右衛門さんという人が買っています。会場に溝口さんいらっしゃいますか。畔右衛門さんの系統でしたら、もしかしたら今でもお宅にあるかもしれませんね。以上のことから、それまでは名主たちの共有財産のなかにこの２枚の世界地図はあったということになります。江戸時代の村で世界地図を共有財産として持ってるなんてことは聞いたことがありません。すごい村だと思います。

もう一つ、その証拠があります。この話から約100年さかのぼった安永４年（1775）、江戸時代後半ですけれど、八ヶ村の名主たちが高田寺の寺宝を改めて目録にしたのです。そのなかに書物についての目録があって[15]、そこに「貞享二年丑 元禄三年午年　一 万国地図　大小二枚　但シ大明地理図」と書かれています。もうひとつの名前は書かれていないのですが、貞享２年と元禄３年という模写年が書いてあるので、確実に「異国渡海船路積図」と「大明地理之図」のことです。この時期には共有財産として名主たちが所有していたということがわかります。この財産目録は20年くらいに一回作るのですが、この一つ前の宝暦３年（1753）の目録[16]にはこの２枚は見えません。ですから1753年から1775年のあいだに共有財産に入ったということになります。

では、この山国神社文書に登場するこれらの地図に関する一番古い情報はいつかということですけど、それは安永４年の財産目録の10年前になります。明和３年（1766）年３月に「山国五社明神」、これは山国にあった５つの神社をまとめた神社、つまり今の山國神社で大規模な能の興行があり、２日間で4000人が集まったとされています。能は神社境内に舞台を作って神に奉納するのですが、同じ期間に隣接する山國神社の神宮寺本堂で、10名のお坊さんによる「十座十万遍之修法」という特別な法要が挙行され、こちらもたくさんの人が参集しました。山国神社文書の中にこの時の費用や出来事を書き上げた記録があります[17]〈図８〉。そこに、この法要の間「院の座敷に大明四百余州之地図を掛け、参詣の輩に拝見せしむ」という記事があります。つまり、神宮寺の書院の座敷に、参

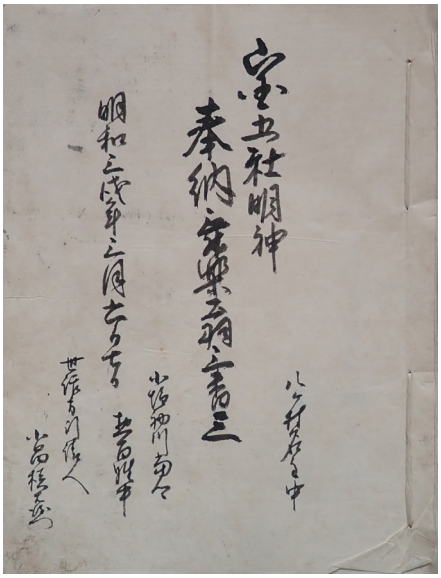

図８　山国神社文書のうち『一宮明神奉納御能舞台地図諸入用勘定目録并諸色訳書』

詣に来たお客さんたちに見てもらうために「大明四百余州之地図」を展示したのです[18]。この「大明四百余州之地図」は確実に「大明地理之図」ことだと考えられます。

さてその一方で、この「大明地理之図」は、山国郷の別のところにあったということもわかってきました。先ほどふれたギメ東洋美術館にある「明朝地理之図」で、東洋文庫チームのメンバーがパリまで調査に行きました。地図名は「大明地理之図」とやや違っていますが、地図は同じものです。この地図は折本といって小さく折り畳める体裁なのですが、表紙にあたる部分に地図名と、誰がいつ作成したかなどの情報が書いてあります。まず、最後に署名している「丹波州周山医生容軒村山光衆」、すなわち近くの周山で医業を営んでいた村山光衆（容軒は雅号）が作成の中心人物で、署名の上の「宝暦十二年（1762）九月朔（1日）」が完成日ということになります。そして冒頭には「大雄大山」すなわち大雄山常照皇寺が「明朝地理之図」を文庫に所蔵していることを知って、近所の小畠氏を誘って模写をはじめたこと、老いた自分たちだけでははかどらないので、「童蒙（若者）」も使って写したため、不正確さがあるかもしれないというようなことが書いてあります。

村山光衆たちが模写した常照皇寺の「明朝地理之図」と、山国郷の名主たちの共有財産となっていた「大明地理之図」は、同じモノだと考えるのが自然だと思います。つまり、宝暦12年（1762）までは常照皇寺にあった地図が、その４年後の明和３年（1766）までの間に、名主たちの共有財産となっていたのです。安永４年（1775）の財産目録では２枚の万国絵図がセットで登場するので、もう一枚の「異国渡海船路積図」も同じ時期に常照皇寺から名主たちの共有財産に移った可能性が大きいと思います。山國神社にある地図のコピーが、今フランス・パリの世界的に有名な美術館に所蔵されているんですよね。すごいことだと思います。

ではなぜ常照皇寺が２枚の世界図を所蔵していたのか。江戸時代は常照寺と呼ばれていたので、ここでは常照寺と呼ばせてもらいますが、わたしには、この人がキーパーソンだろうと思う人がいます。それは、常照寺第13世住持の古霊道充（これいどうじゅう）（1628－1704）です〈図９〉。皆さんのなかで、常照皇寺の檀家だという人がいたら手を挙げていただけますか。結構いらっしゃいま

図９　古霊道充像　常照皇寺蔵

すね。山国に昔からお住まいの方は、こちらの檀家になっている方が多いと思います。この常照寺は非常に格式の高いお寺で、創建したのが光厳法皇（在位1331－1333）です。南北朝時代の北朝の最初の天皇が出家して法皇になって、このお寺を開いたということになります。そして、光厳天皇の御陵（光厳天皇 山国陵）や後花園天皇（在位1428－1464）の御陵（後花園天皇 後山国陵）も裏山にあるわけですね。常照寺は臨済宗天龍寺派に属する寺院ですが、天皇家の人物が創建したということで別格扱いのお寺でした。ですから室町時代は、天龍寺派のなかでも偉いお坊さんが住職として来ていたようなんです。ところが、その頃の史料が全く残ってないんです。なぜかというと、明智光秀が丹波国を平定したときに、その軍勢が寺社を焼いたり土地を奪ったりしたのです。それで常照寺も焼かれて一旦途絶えてしまいます。だから、中世の記録が地元では残ってないんですね。

しかし、江戸時代に入って常照寺も復興が始まります。慶長年間に後陽成天皇（在位1586－1611）が、領地を常照寺に与えるように徳川家康に頼んで、所領が復活し、燃えてしまった建物も少しずつ復興されていきます。最初にその復興の中心になったのは、山国郷下村の水口家出身の雲室周祥（うんしつしゅうしょう）というお坊さんです。この人は臨済宗の僧侶としては結構出世していて、前任地は鎌倉の円覚寺だったんですけれど、復興のために呼び戻されます。そして、地元の名主たちと力を合わせながら復興していくわけですね。そして、お寺の伽藍も揃ってきたというところで、天龍寺の塔頭延慶院で修行をしていた古霊道充が13世、復興後でいえば４代目の住持として迎えられたのです。20歳前後で住職になって、そのあと57年間、76歳で亡くなるまで常照寺住持を務めます。この人物は、江戸時代の常照寺の歴史の中では傑出した住職だと思います。彼には３つの大きな特徴があります。

１つ目は、朝廷との絆をしっかりと繋げたということです。彼が住職のあいだに大規模な朝廷関係の法要が２回ありました。１回目は光厳院三百年忌（寛文３年〈1663〉）。２回目が後花園院二百年忌（寛文10年〈1670〉）。その度に常照寺はたくさん寄附をもらっているわけです。それから、彼の時から常照寺の住職は、天皇や皇族の葬儀にお経を読む役として京都に出向いています。彼が亡くなった後も天皇家関係の葬儀があると、常照寺の住職が必ず出仕することになっています。

２つ目は、先ほども言ったように戦乱とともに燃えてしまった戦国時代以前の常照寺の輝かしい歴史を、何とかまとめようしたことです。寛文４年（1664）、彼が40代の時、『大雄山常照禅寺考略』という、中世以降の常照寺の歴史を復元した書物を完成させました。その序文に、寺の日記や古文書は戦乱でなくなってしまったけれど、天龍寺の古文書には時々出てくるし、村の古老の言い伝えも残っているから、そういうものをかき集めてこの本を作ったと書いています。そういうすごく地道な作業を成し遂げたんですね。

しかし何と言っても、次の３つ目の特徴

です。彼は当時の日本の禅宗界を代表する秀才でした。天龍寺派第一の秀才、臨済宗でも第一の秀才と呼ばれているんです。そして、彼は臨済宗の中で学問の才能でどんどん出世していくんですね。延宝元年（1673）、50代ですけれど、臨済宗内でも格式の高い鎌倉の円覚寺の住職になっています。そしてその10年後の天和２年（1682）には、「五山碩学（ござんせきがく）」という地位に就きます。これは臨済宗の五山のお坊さんの中で、特別に幕府から毎年100石分（金100両）の給料がもらえる、今で言うと年金が支給される文化功労者みたいなものです。そして、その２年後の貞享元年（1684）に以酊庵（いていあん）の住持という特別な職に任命されます。以酊庵は朝鮮に近い対馬にあるお寺ですが、単なるお寺ではなくて幕府の外交機関でした。朝鮮から使節が来る時に、まず必ずこの以酊庵で予備交渉をするんです。そのときに、外交文書を作成したり、相手の文書を読解したり、相手と交渉する責任者が以酊庵住持なのです。対馬まで行くのは大変ですけれど、これは禅宗界でもとりわけ格式の高い名誉ある役職でした。ですから彼は、当時の禅宗界では本当に一・二を争う学識を持っていた人物なんです。

わたしはこの地図の来歴について重要だと思うのは、２つの地図が模写された年代が、彼が常照寺の住職だった時代に収まるんですね。常照寺に２枚の世界図の模写本が入った、あるいは模写させてそれを常照寺が所有するようになった。このことは、彼の存在抜きには考えられないと思います。単なる仏教の勉強だけではなく、外交もやったわけですから、彼は当時のアジア、中国を中心とした東洋世界の知識についても強い知的関心を持って、いろいろなものを収集したのではないでしょうか。それらを身近に置こうと思ったら、カメラやコピー機がない時代は書き写すしかない。自分ができない場合は、お金を払って誰かに頼んで書いてもらうしかないわけですが、彼には碩学料という安定した収入もありました。このような事情で、この２枚の世界図が常照寺に入ったんじゃないかなと思います。

それでは、どうして常照寺から山国郷の名主たちに所有権が移ったのか。これはまだわかりません。それがわかる史料がないかということで、去年８月に２日間、常照寺の古文書の調査・撮影をしました[19]。その後、１年間かかってようやく先月、撮影した史料の整理が終わりました。これから本格的に読んでいく段階なんですけど、撮影した画像を整理しながらざっと見たところでは、直接この世界図のことについて書いてあるようなものはないように思いました。でも、よく読み込んでいけば関係する情報があるかもしれません。それは今後のお楽しみということで、わたしの話はここまでにさせてもらいます。

［**村山**］ありがとうございました。非常に熱のこもった、いかに重要な地図であるかということを再認識させていただけたのではないかなと思います。一旦ここで休憩を取らせていただきます。

［**村山**］ここからは、先生方にいただいたお

話をもとに、座談会的に進めさせていただきたいと思います。今回のこの世界地図について、「大明地理之図」に関しては鳥居先生も総代さんたちも昔からご存じだったということだったわけですけれども、鳥居・藤田両先生からのお話の中にもありましたように、もうひとつの世界地図「異国渡海船路積図（貿易情報文付旧世界図）」が一時行方不明というか、どこにあったのかわからなくなっていたのが再発見されて新聞報道された。その結果、このまま置いておいたら、お宝であるからこそ、蔵破りの可能性があるということで、今は京都市歴史資料館に預けておられるというお話だったわけですけれども、その見立てはどうも間違ってなかったらしいと。こうした文化財はわれわれも調査して言われるんですけれども、いくらで売れるかとか、値打ちなんぼかと聞かれるんですけれども、ほとんど値打ちはございません。いわゆる古文書類は、昔は目方で売られていました。１点いくらではなくて、まとめて１キログラム千円とかで売られていました。その中から価値のあるもの、例えば徳川家康の書状とかが出てきたら売れるんですけれども、大多数は売れません。売れないんですけれども、なかにはこのように金銭的価値がつきそうなものもあるんだということで、文化財的価値と金銭的価値の両者が絡み合っているもの、それが今回のこの２枚の世界地図ということでございますが、鳥居先生にお伺いしたいんですけれども、総代さんになられて初めて「大明地理之図」を虫干しされたとき、どのようにお感じになられましたか。

村山弘太郎氏

［**鳥居**］そうですね、最初に見たときに、どうして山國神社にあるのかと。まず藤野前宮司に聞きました。そしたらわからないと。先ほどもありましたように、藤野さんの先祖の斎さんが、どうも残った地図をまた買われたということらしいので、そういったようなことだったんでしょう。わたしはそのときには、山国隊を出している土地ですので、おそらく明治維新の前後ぐらいの頃に、そういう機運のある場所に来られた方が、山國神社に寄贈したんじゃないのかなあと。でももうそれすらわからなくなってしまったんだろうくらいに思っていました。だから江戸時代の中頃に模写されて、常照寺に入って転々としてきたというようなイメージは全く持っていなかったです。外の人が持ち込んできたのだとばかり思っていました。

［**村山**］そうですよね、やはり外から山国に入ってきたというふうに考えるのがわかりやすいかと思います。幕末にどんどんと外に開いていくのがこの地域ということだったと思いますので、それで奉納されたというふうな形だと思われていたのが実はそうではなくて、はじめからここに用意された

ものだった。この地域、地域といいますかひとりの僧侶がこれを求めたということなんですけれども、その辺りについて藤田先生、何かもう少し追加でご説明ありましたら、古霊道充という僧侶はどういうふうな感じで外を向いていたのでしょう。

［**藤田**］この人は秀才なんですけれど、いわゆるクールな秀才ではなくて、熱い秀才なんですね。学問の世界に閉じこもるわけでもないし、日本一になってやろうというような上昇志向だけではなく、地域のこと、自分が住職になった常照寺のある山国郷のこともいろいろやっていた。朝廷との絆を強めたり、失われた歴史を復元したりとかで、頑張った人でもあるんですね。だから彼が天龍寺派最高位の天龍寺住持に就任したときには、山国の檀家さんたちが祝賀の催しをしているように、山国の名主さんたちともいろいろ交流があったのではないかと思っています。常照皇寺に世界図があるという情報は、周山の村山光衆が持っていたぐらいですから、地元の山国の名主さんたちも、実際に見たかどうかわかりませんが、道充さんの集めた外国のことが分かるいいものがたくさんあるらしい、くらいのことは知っていたんじゃないかなと思います。

［**村山**］ありがとうございます。そうですよね、すごくいいものがあるからこそ、周山の村山氏がそれを写したということになるかと思います。今のお話で、とくに朝廷との関係をしっかり築こうとしたということで、それは今でも痕跡が残っております。わたしも昨年の常照皇寺での調査に付き合わせていただいたんですけれども、蔵のなかを拝見しますと、菊の紋章が付いているものが結構あるんですが、菊の紋章の使用が明治２年（1869）から昭和22年（1947）まで法律で禁止されていました。近代は天皇制の時代ですから。だけれどもあれだけちゃんと残しておられたということを考えますと、やはり相当強い朝廷との関係をこの時代に持たれていたんだろうなというふうに考えられます。それでこの村山氏というお医者さんが「大明地理之図」を模写したわけなんですけれども、これは藤田先生、残っているものはどこも同じぐらいの大きなものということですね。

［**藤田**］だいたい同じです、10～20センチメートルぐらいの違いはあってもだいたい同じサイズですね。

［**村山**］かなり大きいですね。村山氏の写したもののお話を伺っていますと、何人かで写したということかと思うんですけれども、山國神社さんが所蔵されておられる地図の実物大がそちらの展示室にもございますので、ぜひ後ほど見ていただきたいんですけれども、本当に大きいです。四畳半ぐらいありますので、ああいったものはどうやって写すのか、あるいは作成するのかが非常に気になるんですけれども、この辺りに関しましては文化財保護課の絵画担当の方がおられますので、何か知見ありますでしょうか。あれはどうやって写したんですか。

［**安井**］文化財保護課で美術工芸品の絵画の担当しております安井と申します。これは紙をある程度の大きさまで継いで写しているとは思います。絵具が紙継ぎの上にのっている部分があるので、何分割かしたものを最後に貼り合わせて大きい面積にしていると思います。

［**村山**］なるほど、模写もおそらくそういう形で作られるだろうと考えてよろしいでしょうか。やはりオリジナルは養志堂ということで、これは藤田先生まだ確認されていないんですよね。

［**藤田**］そうですね、残っているかどうかもわからないですね。

［**村山**］一遍火事に遭っているので残っていない可能性があるんですけれども、そちらから写されたかなり古い段階のもの、オリジナルに近いものだろうと評価してよいかと思うんですけれども、これのさらにコピーが、世界的に有名なギメ東洋美術館に入っているということなんですけれども、ご所蔵されているもののコピーが、フランスの有名な美術館に入っているというのは、鳥居先生どうお感じになられますか。

［**鳥居**］周山の人が常照寺さんで写したんですよね。最後はギメが買ったのではないかと思いますけれども、そこに至るまで、周山のお医者さんである村山さんからどうやって流れていくんだろう。でもそういう経緯も一切書いていない。書いてないんだけど常照寺にあったものを写したというふうに書いてあることがものすごく重要で、ほかの地図にどういうことが書いてあるのかよくわかりませんけれども、来歴というか、どういうふうに繋がっていったかが分かるのは、ギメのものだけなんでしょうか。８枚あるなかで、養志堂のものを写したというのはだいたい分かるんですか。

［**藤田**］来歴はギメの表紙が一番はっきりとわかるんですけれど、中央大学付属図書館にあるものにも、京都の中で転々と移されていたという情報があります。この地図も調査が予定されていたんですけれど、コロナ禍に引っかかってしまってできない状態です。東洋文庫のものは、山形のお医者さんが若い頃京都に修行に来ていて、その時に接して京都で写したということがわかります。だからやはり京都周辺で写されたということですね。「異国渡海船路積図（貿易情報文付旧世界図）」は長崎で写されたり、江戸・大坂で写されたりとか、いろいろなところで写されているんですが、「大明地理之図」は京都からあまり動いていないような気がします。

［**村山**］ありがとうございます。やはり「異国渡海船路積図（貿易情報文付旧世界図）」に関しては、オリジナルはどうも長崎で写されたらしいと。さらにそのあと写されて、山国の地域に入った。他のところもそれぞれの地域にあったものが、もとの所蔵者の手から離れて博物館や大学図書館に入ってしまっているんですけれども、そのようななか山國神社にこれまで受け継がれてきたことは非常に重要なことかなと思い

ます。こうしたものに関しましてもやはり調査の中で発見される。「大明地理之図」に関しましては、関係者は知っているという存在だったわけですけれども、「異国渡海船路積図（貿易情報文付旧世界図）」に関しましては、東京大学のチームであるだとか、あるいは中央大学のチームであるだとか、東洋文庫のチームというようなところの調査がないと再発見に繋がらなかったのではないかなと思われるわけなんですけれども、こうした調査をすることの意義というのを藤田先生、何かありましたらいかがでしょうか。

［**藤田**］そうですね、宮司さんのお話で印象的だったのは、自分たちは虫干しのたびに見ていたということです。そういう地元の世界と学術の世界とが交わるっていうのは、調査をやらないとないわけですね。そこがやはり調査することの大事なところです。常照皇寺さんの史料も、二十数年前に禅文化研究所が調査して目録を作っているんです[20]。わたしたちはその目録を頼りに調査したわけですけれど、以前の調査は宗教学の人たちのチームで、考え方が歴史学と違うところもあるので、やはり継続して調査をすることが大事だと思います。

もうひとつは、昔、よくわたしたちは先生から「本棚は糠漬けと一緒でかきまぜないと腐るんだよ」と言われました。わたしの実感でもあるんですけど、常に本棚は触っていないと、どこに何の本があるかわからなくなって、結局必要なときに必要な本が出てこないんです。寺社や旧家の史料も同じだと思います。山國神社のほうは中央大学チームが長年、調査・整理をされてきましたが、常照皇寺の史料や美術品も整理や虫干しを定期的にやって、どこに何があるかやどんな状態なのかなどが、世代を継いで認識されていくことが大事だと思います。地域の方々だけでは難しい場合は、今はいろいろなところで、歴史・美術・博物館学を学んでいる大学生がボランティアとして地域の方と協力して虫干しをしている事例があります。そして虫干しの合い間に、整理でわかったことを地域の方々の前で発表したり、広報紙に書いたり、そんなこともしているんですね。そういうことを今後、京北でもできればいいなと思っています。

［**村山**］ありがとうございます。いかに調査が重要だということをおわかりいただけたのではないかなと思います。

もう少しだけ時間がありますのでお話を進めます。いま研究者側の視点としてのお話だったわけなんですけれども、調査を受け入れる側として、鳥居先生何か要望であるだとか、お感じのところがありましたらお願いいたします。

［**鳥居**］山國神社は坂田先生の関係でいろいろ調査していただいています。山國神社に来ていただいたときには、防虫剤を大量に持ってきていただいて、入れ替えてくださってるんですね。学生さんを連れてきてくださいますから、古文書を見ようというのがひとつの目的かもしれませんけれども、やっぱり長く保っていけるように手当もしてくださるので、神社としてはすごく

ありがたい、そのように思います。それと蔵は不思議なもので、多分わたしたちの時間の長さと比べると、どういうふうに言うんでしょう。蔵のなかにちょっと入れたら百年ぐらいはすぐに残るというか、経つというか、そんなようなことだと思うんですね。ですから温度変化も少なくて暗い、虫干しっていうのは必要であるにしろ、ああいうところに入れておくというのは、タイムカプセルみたいな、そういうような働きがあって、残りやすいのかなというふうに思います。だから今申しましたように、定期的に来てくださるのは、神社としてはすごくありがたい。

［**村山**］ありがとうございます。われわれは調査する際には所蔵者の皆さんにご迷惑をかけている、手を止めて時間をいただいているというところがありますので、こういうふうなご意見いただけますと、非常にありがたく思います。

藤田先生も鳥居先生もおっしゃったように、やはり虫干しの重要性なんかもございますので、冒頭に申し上げましたような京北文化財調査会も、必要であればそういったところも踏まえて、一緒に仕事をさせていただければよいかなというふうに考えております。

今回のお話は重要なところが幾つもありましたけれども、やはり今回は藤田先生の成果ということになりますが、２枚の地図の来歴がかなり正確に分かってきた。「大明地理之図」は常照皇寺にあったものが、何らかの理由で名主仲間の共有財産に移った。その後、財産処分のなかにおいて、藤野斎さんが購入されて、さらにその後に山國神社に入ったということであります。多くの場合、外に流出します、地域から出ていきます。しかし、それをずっと守り続けてきたというのが、やはり山国の地に残ったことの意義ではないかなというのが、今回の調査、今回のお話で、わたしも勉強させていただきましたし、皆さんにもご理解いただけたのではないかなと思います。長時間にわたりご清聴いただきまして、誠にありがとうございました。最後に、鳥居宮司から一言ご挨拶をいただけたらと思います。

［**鳥居**］今日はたくさんの皆さんに来ていただいてありがとうございます。一番心配してましたのは、何人来てくださるだろうかというふうに思って、神社の方、他の方にもよろしくと申してましたけども、実際に今日ここへ来て始まるまで、席が全部埋まるのかなと心配しておりましたけれども、貴重な時間を使って来ていただいて、まずはお礼申し上げます。

それと併せまして、こうして京都市さんで文化財指定をしていただいて、地図を預かっていただいているというようなことで、いろいろお世話になりました。先生方にも指定に関してお世話になりました。先ほども申しましたけど、わたしは正直、来歴はなかなかわからないだろうというような思いでおりましたから、こんなこともわかるんだというのは非常に驚きです。調べていただいてよかったなと思います。

最後に皆さんにお願いというか、将来的にお願いをしなければならないなと思って

いることがひとつございます。それはですね、地図がだいぶ傷んでいるということなんですね。文化財指定するにあたって修理業者さんに見ていただいたところ、修理費用が何百万かかかると。けれども何かいい方法でもって修理ができる時にしないといけないなというふうに思っております。もとより山の木が売れるような時代ではございませんし、山國神社で持っておりますものを売って修理するなんてことはできません。そういうような意味ではですね、皆様一人一人の熱い気持ちを、そういうところで寄せていただかないといけない日が来るのかな、と思ったりしておりますので、最後は皆様にお願いになりますけれども、そういったことをお話して、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

［**村山**］ありがとうございました。では座談会はこちらで終了させていただきます。

　あとは、京都市の山下さんにお返しいたします。

［**山下**］先生方ありがとうございました。文化財にとって大事なことは、所有者とその周りの方が、その文化財のことをよく知っているということだと思います。それが文化財を大切にすることに繋がると思うので、こうして地元の皆さんにたくさん来ていただいてお話ができて、それを共有できたのはとてもよかったと思っております。今日はお越しくださいましてありがとうございました。そして先生方ありがとうございました。

図10　展覧会「未来へのおくりもの　京都府×京都市指定文化財」チラシ

　ひとつお知らせですが、９月27日から京都文化博物館で、京都府と京都市の指定文化財の展覧会をいたします[21]〈図10〉。こちらに２枚の世界地図の実物を展示いたします。「大明地理之図」は通期、つまり９月27日から11月24日まで展示されます。「異国渡海船路積図」は展示替えがありまして、後期の10月28日から11月24日に展示されます。もしお近くに行かれる機会があればぜひお立ち寄りいただければと思います。

　この後は展示室で自由参加のギャラリートークをさせていただきたいと思います。考古資料もたくさん展示してございますので、文化財保護課の展覧会を担当した技師から、そちらの解説をさせていただきたいと思います。お時間ございましたらお付き合いいただければと思います。本日はありがとうございました。

付記

本稿は、座談会「山國神社に伝わる世界地図をひもとく」の録音記録を文字起こし・編集したものである。

図版出典

図５・６　座談会資料より転載

写真撮影

図４・７・８・９・会場風景・登壇者　京都市文化財保護課

山下（やました）　絵美（えみ）（文化財保護課　主任（美術工芸品担当））

註

１）京北文化遺産センター令和７年度企画展「世界地図を拡げて―大航海時代の京都と山国」
会期：令和７年７月26日－12月22日
そのほかの関連行事：
〈ギャラリートーク〉９月14日(日)・10月12日(日)・11月９日(日)・12月14日(日)
〈親子向けワークショップ〉「江戸時代の世界地図で遊ぼう！」８月23日(土)
（協力：TOPPANホールディングス株式会社）

２）ともに令和７年３月28日、京都市有形文化財（美術工芸品－歴史資料）に指定。
名称及び員数：
異国渡海船路積図　１鋪
　貞享二〈乙／丑〉歳再写之等の奥書がある
大明地理之図　１鋪
　元禄三龍集庚午初冬下浣、以養志堂蔵書模写之等 の奥書がある
所有者：宗教法人山國神社
法量(cm)：
異国渡海船路積図　縦118.5×横121.0
大明地理之図　縦284.5×横365.0

３）昭和９年（1934）６月に、東京大学史料編纂所が模写（東京大学史料編纂所「所蔵史料目録データベース」https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w01/detail/full-disp/00013189?page=1&itemsperpage=200）

４）坂田聡（研究代表者）『中世後期～近世における宮座と同族に関する研究　―主に丹波国山国荘地域を例に―　平成17年度～平成19年度科学研究費補助金　基盤研究(Ｃ)　研究成果報告書（課題番号17520449）』（2008年）所収「山国神社文書目録」。

５）前掲註４ 山国神社文書のうち「日本長崎ヨリ異国江渡海之湊口マテ船路積」貞享２年（1685）（226/1-64）

６）令和元年（2019）11月17日(日)京北合同庁舎「山国荘調査団　調査成果説明会」京北合同庁舎３階大ホールにて

７）平成31年（2019）１月28日の京都新聞朝刊で「江戸初期 山国地域で世界語る？京北の神社 貿易地図発見」、同年２月11日の京都新聞オンラインニュースで「江戸初期の世界地図、官軍「山国隊」輩出の地で発見」と報道。

８）前掲註４ 山国神社文書のうち「大明地理之図」元禄３年（1690）（366/3-129）

９）「桑田郡山国里」・「秦長椋伊賀加太万呂二人六斗」（奈良文化財研究所「木簡庫」https://mokkanko.nabunken.go.jp/ja/6AFITI11000104）

10）前掲註４

11）貞享２年（1685）版『京羽二重』巻六「医書講説」の項に収載。なお、宝永２年（1705）版『京羽二重』巻三「医書講説」の項には「下立売東洞院西へ入」とある（『新修 京都叢書』第二巻、臨川書店、1993年）。

12）『浅井氏家譜大成』によれば、養志堂は周伯没後の宝永の大火（宝永５年〈1708〉）で焼け、その後本拠を名古屋に移したという。

13）この座談会後に神戸市立博物館が「大明地理之図」を所蔵していることが判明し、現在は９点となっている。神戸市立博物館編『古地図からひろがる世界－南波松太郎・蒐集70年の軌跡－』（2025年）参照。

14）前掲註４ 山国神社文書のうち『八ヶ旧名主諸道具売上帳』明治７年（1874）12月17日（26/1-21）

15）前掲註４ 山国神社文書のうち『諸方書物目録帳』安永４年（1775）６月24日（668/5-41）
16）前掲註４ 山国神社文書のうち『五霊大明神宝蔵帳箱　山國諸証文入日記』宝暦３年（1753）６月18日（41/1-32）
17）前掲註４ 山国神社文書のうち『一宮明神奉納御能舞台地図諸入用勘定目録并諸色訳書』（『山国五社明神奉納舞楽翁三番三』）明和３年（1766）（940/100-6）
18）「一　神宮寺本堂ニ十座十万遍之修法執行あり。院之座鋪ニハ大明四百余州之地図を掛ケ参詣輩ニ令拝見。」
19）令和６年（2024）８月24日・25日実施。調査員は藤田明良（天理大学教授）・村井章介（東京大学名誉教授）・高橋公明（名古屋大学前教授）・若松正志（京都産業大学教授）・伊藤幸司（九州大学教授）・顧明源（九州大学助教）・村山弘太郎（京都外国語大学教授・京北文化財調査会代表）・山下絵美（京都市文化財保護課）・今中崇文（同）。調査にあたっては、常照皇寺総代・村山仁志氏に多大なるご協力をいただいた。
20）『常照皇寺文物　調査整理報告綴（全）』（禅文化研究所調査班調査・大南和夫記録、2002年）
21）京都文化博物館2025年度総合展「未来へのおくりもの　京都府×京都市指定文化財」（令和７年９月27日－11月24日）